

HAKUOH

白鷗大学

識字と読書

白鷗大学教育学部教授
結城史隆

現在、開発途上国の教育課題の一つとして、識字教育がしばしばとりあげられ議論されている。わが国の歴史においても、庶民の大多数は字が読めなかった。

識字教育関係者の間では大変有名なものとして、北代色さんの「手紙」がある。

彼女は貧困と差別のなかで学校に行けず、70歳になって、はじめて字を覚えた。「夕やけが美しい」と題されたその「手紙」には、次のような一節がある。

「夕やけを見ても　あまり　うつくしいと思わなかつたけれど　じを　おぼえて　ほんとうにうつくしいと思うようになりました。

みちを　あるいておっても　かんばんに　きをつけていて　ならつた　じを　見つけるといへん　うれしく　思います。」

大変感動的な手紙で、字を知った喜びがストレートに伝わってくる。看板に習った字を見つけてうれしくなる気持ちは良くわかる。ただ、「字を知るとなぜ夕焼けが美しく見えるのか」「字を知らない人は夕焼けを美しく見ることができないのか」という疑問を感じる人もいるだろう。このことは識字や教育を考える上で極めて重要なテーマなのである。

ユネスコの識字啓蒙アニメーションに、非識字者の女性が大変苦労する話が出てくる。「字を知らないために、バスの行き先がわからず、町では看板が読めずに薬屋を発見するのに苦労し、薬と農薬を間違って飲みそうになる。」このストーリーは識字教育の重要性を訴えるもので、それなりの意味があるが、虚構であることには少し考えればわかる。

現在の私たち日本人の多くは、自分は字を読むことができ、非識字者は特別の事情があったたり、開発途上国にいたりすると考えがちである。

しかし、私はネパールに3年間住んでいたが、ネパール文字は読めない。それでも、薬屋と八百屋を間違えたことはないし、バスにも乗れた。スリランカに行っても、タイに行っても現地の字は読めない。字を知らない日常生活中で困ることはあまりない。

また、「字を知らないと商人に騙される」という人もいるが、ネパールの知り合いの多くは騙されていないし、日本では詐欺事件があとを絶たない。

さらに、「字がないと記録が残らず、文明が築けない」という人もいる。しかし、川田順造氏の『無文字社会の歴史』(岩波書店 同時代ライブラリー)には、西アフリカの文字をもっていない民族の文化と歴史が充実に書かれている。これを読むと、文字に依存しているわれわれ近代人が、いかに想像力や記憶力を衰退させてしまったかがよくわかる。

一方、識字に関して、「教育の悪循環論」というのがある。これは「開発途上国の中には教育を受けられない子どもがいる」ので改善していくなければならない、という運動の基本となっている。すなわち、貧しい家庭の子ど



もは労働にかりたてられるので学校に行けない。そのために、字を覚えられず知識も不足し、商人に騙されるし、良い職業につけない。その結果、ますます貧しくなる。この悪循環を打破するためには、義務教育・識字教育・教育支援が重要になるという考え方である。しかし、事態はこれほど単純ではない。

例えば、「教育を」受けることのできない子どもは本当にいるであろうか。子どもを「教え」「育てる」機能を持たない社会は存在しない。教育がないと社会そのものが継承されずに滅んでしまうからである。知識のない人間など存在せず、農民には作物のつくり方から家畜の飼い方まで多種多様な豊富な知識がある。

したがって、教育を考えるには、コミュニティや家庭で「教える」とと、学校で「教える」ととの間には、何が本質的に異なるのかを考察しなければならない。

ネパールの教育省で聞いた興味深い寓話がある。「5キロのウシと10キロのウシをたすと何キロになる」という問題に対して、学校に行った子どもは素直に「15キロ」と答えた。しかし、学校に行ったことのない農民たちは、はたと考えてしまった。悩んだあげく一人の男が周りの人へ聞いた。「おまえ、5キロなんて小さなウシを見たことあるか」と。

これは出来すぎた話であるが、「ローカルな知」と「教育の知」の性格の違いを端的に現している。地域の知識は即物的・具象的であるに對して、学校の知は形式的・抽象的である。学校では会ったこともない偉人、行ったこともない国、見たこともない物について教えられる。

それによってローカルな知とは異なる思考方法が導入されることになる。

人類の歴史の長さを考えると、公的な学校が整備され一般の人が字を読めるように訓練を受けたのは、つい最近の二百数十年前に過ぎない。それは、近代主義と産業革命、そして市場経済の拡大という状況と深く結びついていた。

それでも、開発途上国の識字教室をのぞくと、成人女性たちの笑い声が響いている。家事労働をいつとき忘れ、同じ境遇の仲間たちと触れ合う解放感にあふれている。彼女たちはたちまち自分の名前を文字で書ける喜びを手にするであろう。ただし、新聞や本など文字から情報を得るのはまだまだ先の話で、そこまでたどりつけた人は多くない。

すなわち、識字教育のポイントは、字を知ることよりも社会の束縛や差別感、閉塞感から少しでも解き放たれることにあるよう気がする。それが冒頭の「夕焼けが美しく」見えることにつながってくるのであろう。

一方、我々の社会においては、字を知っていても本を読まない、読んでも理解できない、まともな文章を書くことすらできない若者が多く存在する。中高年者の中にも、夕焼けの美しさに気がつかず、抽象思考はできず、自分の身の回りの体験だけでしか語ることのできない人が多くいる。

私たちは字を知ることの原点をもう一度考える必要があるかもしれない。

参考文献 無文字社会の歴史 川田順造著
岩波書店 (389.44/KA)

《書評》

『世阿弥』

東山 緑 著 東方出版

白鷗大学教育学部助教授
内 山 須美子

世阿弥といえば、歴史の教科書でお馴染みであるが、能の大家であるということ以外はあまり知られていない。この本は、世阿弥と3人の將軍との関わりを、巧みな心理描写の元に描いた歴史小説である。

当時、貴族達からは「乞食の所行」と蔑まれた「猿楽」の大正芸人の息子に過ぎなかった13歳の世阿弥が、前撰政関白で北朝公家の代表的存在であった二条良基に見いだされたのは、稀

代の美少年であったこと、父觀阿弥の貴人の賞玩を目指す教育方針によって、この若さにして蹴鞠や連歌に堪能であったことによるものである。良基によって「藤若」の名前を与えられ、後に3代將軍義満の愛顧を受け元服して「觀世三郎元清」と称するようになる。20代の義満は花の御所といわれる美しい室町第を好んで住んでおり、その傍らにはいつも5歳年下の美しい世阿弥がいた。義満の愛顧を受けて觀世座は安

泰し、求められればすぐに演能し得る京の都に居を構えて、世阿弥は能を義満好みの絢爛豪華なものに仕立て上げていった。

応永15年（1408）、その義満が51歳で没すると、後に将軍となったのは義持である。義持は、父義満が、義持にとっては異母弟にあたる次男の義嗣を異常なまでに偏愛したことに深く傷つき、将軍職を得ても執拗に義嗣を屈従させようとし、後に義嗣を幽閉し殺害したほどである。当然、その芸術的愛顧は、父義満が愛した世阿弥ではなく、増阿弥へと注がれた。側近に多くの知識人をおいたとされる義持は、もともと知的で審美眼の高い人であったらしいが、華やかさよりもさびさびとした幽玄を好んだのには、父義満への反発も作用していたのだろう。世阿弥はこの頃から、芸の形を義持好みのシックな芸風に変えていくのである。

応永35年（1428）、その義持が43歳で急死した後、将軍となったのは義教である。彼が将軍職に就く以前から懇意にしていたのは「音阿弥元重」であり、悩みも打ち明けるような親しい仲であった。元重は、世阿弥の異母弟である四郎の息子、つまり甥にあたる。世阿弥の息子である「元雅」「元能」らとは3兄弟と思われるほど仲良く能の稽古に精進していたし、世阿弥も息子同様に稽古をつけて可愛がった。永享元年（1429）5月3日の室町御所における演能「多武峯猿楽」には、元重と、世阿弥の長男元雅が出演し満員御礼の大成功を納めたが、元雅の方が評判となってしまった。懇意にしていた元重への期待が膨らんでいただけに、この結果は義教の機嫌を損ねた。演能のわずか10日後、世阿弥の元には「京での一切の演目を禁止する」達しが届けられ、追い討ちをかけるように、長男元雅は醍醐寺の樂頭職から罷免された。更に、義教は世阿弥がしたためてきた数々の伝書を、元

雅ではなく元重に相伝するように命じたが、世阿弥がこの相伝の命に背いたことが義教の逆鱗に触れた。義教は瘤瘡持ちで、面白くないことがあれば瑣末なことで強権の刃を誰彼構わず振り下ろしたような人である。その義教の徹底的な世阿弥潰しは更に酷なものになっていった。永享2年、次男元能は絶望感から出家し乞食坊主となり、永享4年、長男元雅は元重の告げ口が発端となり、南朝に味方したとのあらぬ疑いをかけられ殺害される。永享6年には73歳の世阿弥がその理由も不明な中、佐渡への島流しの刑を受ける。世阿弥が亡くなったのは、義教がその非道ぶりから暗殺された2年後の嘉吉3年8月8日、81才の時であった。

「絢爛豪華（義満）」、「怜俐明晰（義持）」、「激越非道（義教）」なカラーを持つ3人の将軍達。「大夫（主演俳優）」を巡っての観世座内部の争いと策略。本当ならば、至芸への努力には何者にも囚われない自由が保証されるべきなのに、スポンサーの好みや嫉妬や欲望がその自由を奪っていくところが現実的で面白い。世阿弥は「上の媚びのうまい輩が出世するとぼやきつつ、芸の形を変えていくが、一族皆殺されるかもしれないのに伝書だけは渡さなかっただりはかなりクールである。史実に基づいた登場人物の心理描写は虚飾がなくリアル感を与えている。382ページに亘る長文を一気に読ませるスピード感はこの著者の持ち味である。情景描写は美しく一枚の絵のように脳裏に浮かび上がる。女性ならではの筆致である。600年を過ぎた今なお、能は世阿弥の志向した路線に沿って発展している。乞食と同一視された猿楽に世阿弥のような人が出現したのは奇跡であるし、彼が日本が誇る天才の一人であることは間違いない。著者はこの天才を悩める一人の人間としてとても身近なものにしてくれる。

図書館ニュース

〈本館・分館共通〉

● 開館時間 【平 日】 9:00~20:00

【土曜日】 9:00~16:00

● ワークステーション 閉館30分前まで

※ 時間変更等は、ホームページにて確認できます。

〈分館〉

● 2007年より、「有斐閣アルマ」の継続購入が決定しました。

お知らせ

本館2FにSelf-Access Learning Center (SALC)ができました。

知識と楽しみの宝庫

白鷗大学教育学部助教授
ロレイン ラインボールド

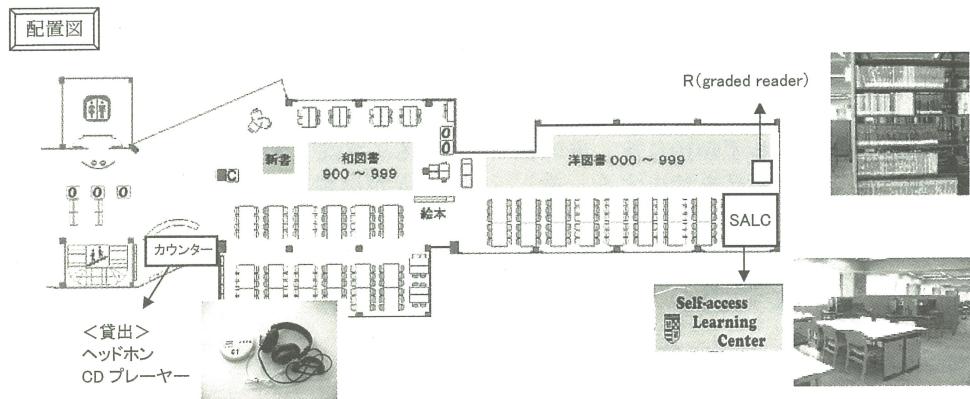
白鷗大学教育学部助教授
宮里恭子

皆さんは、図書館は、情報検索のためだけではなく、自分のやり方やペースで学習できる空間であるということに気づいていますか。2007年度から、白鷗大学図書館では、主に英語学習用の自習スペースとして、Self-Access Learning Center (SALC) のコーナーを提供することになりました。

英語をはじめとする外国語を何年勉強しても上達しないと感じている人がいるかもしれません。しかし、大学で何年勉強しようと、授業をいくつとろうと英語をマスターできる保証はありません。授業は単に科目を教える場にすぎず、もっとも重要なことは、授業外にいかに勉強するかなのです。教室の外でこそ、授業で習ったことを強化したり、批判的に考え、新しい技術や知識を身につけることができるのです。

授業では、個人個人のレベルに合わないこともありますが、SALCでは、一人一人が主役で、自分に合ったレベルで自主的に勉強することができます。自分の好きな英語のDVDやビデオを見たり、ファッション雑誌やニュース雑誌、本、小説などを読んだり、発音矯正や情報検索にコンピュータのソフトウェアなどを使って、リラックスしながらアカデミックな環境のもと勉強することができます。

図書館1階中央には、英語の新聞や雑誌があり、テレビのモニターでDVDや映画を見ることができるAVルームがあります。2階の右手には、英語やその他の外国語の蔵書があり、途中に英語の絵本などもおいてあります。そして、その一番奥にSALCがあります。graded readerと呼ばれるレベル別読み物シリーズで読解力や語彙力を伸ばすこともできますし、CDを聴きながら読むこともできます。もちろん、図書館なので静かにする必要がありますが、自分のスピードで勉強できる空間こそ、白鷗大学SALCエリアなのです。使い方が分からぬ場合は、英語教員や図書館スタッフがサポートします。さあ、知識を広げ学問の楽しみを見つける旅に出ようではありませんか。そして、自分の宝を見つけ出しましょう。



ささやき

春です、図書館にいらっしゃいませんか？図書館の中で、分からないことがあれば気軽にきいてください。そうしていただくことで、私たち図書館員もみなさんのニーズを直接的に知り、それを購入希望をはじめとする図書館の運営にいかしていくことができます。



新着情報は、ホームページで確認できます。

平成19年4月1日 発行
編集発行 図書館だより編集委員会
行 白鷗大学総合図書館
〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117
(0285)22-9737 (直通)
ホームページ印 刷 印刷所
<http://www.hakuoh.ac.jp/library/>
株尚文堂印刷所

A treasure-trove of knowledge and fun

ラインポールド, L. (教育学部助教授)

Have you ever been to Hakuoh University's library? Do you think a library is a boring quiet place full of dusty books that you go to only when you have to write a report or study for a test? To a certain degree, you are right. It is a peaceful place to concentrate and study. Nevertheless, in this library you not only find information, but you are able to study for yourselves at your own pace and convenience in your own learning style.

From 2007, Hakuoh University has opened a corner devoted to independent learning in the library. It is called the Self-Access Learning Center (SALC) for English studies. It is not exactly a center as in a large independent building, but our SALC area in the library offers students a valuable way to become truly independent learners in studying English.

You may have felt in high school that no matter how many years of English you studied, you were not able to master English or any foreign language. Even in your years at Hakuoh University or any other university, no matter how many classes you take, there is no guarantee that you will master the English language. The most important aspect of learning is how you study outside of class. This is not about learning to study in high school or in a university, but for your entire life. In class you are mostly taught about the subject, but outside of the classroom, you must try to reinforce what you have learned, think critically, and acquire new skills and knowledge. We all learn from experience, by thinking, by practicing, and acquiring knowledge.

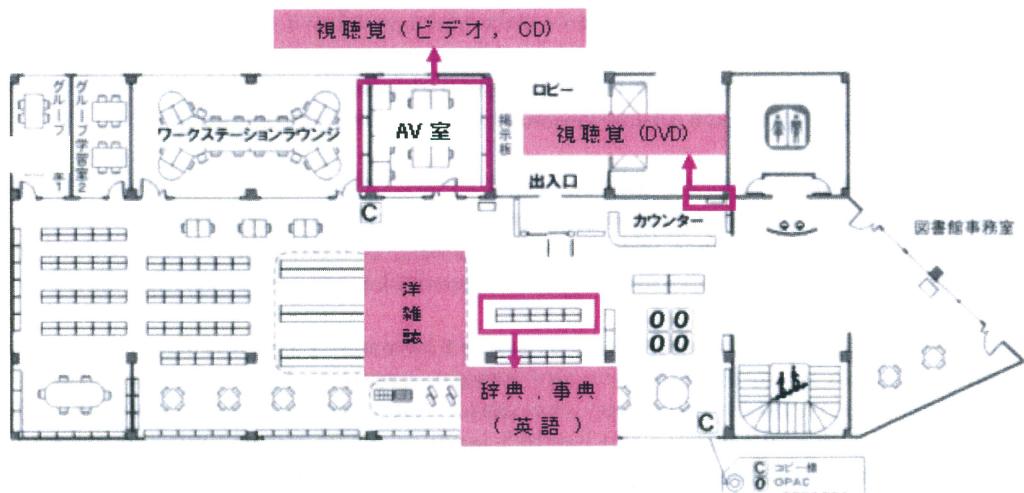
Have you felt that your English class was too difficult or too easy for you? Maybe the level was low and you felt bored, or it was too difficult so you lost interest. In the SALC area, you are the main student. You can build autonomy and work independently at your own level. In the SALC, you can access a large variety of materials. You can improve your English by watching your favorite movies on DVDs and videos in English, by reading fashion or news magazines and books, reading and listening to novels in English, and using computer software to listen to English pronunciation or to search for information at your own pace in a relaxed but academic environment. Teachers, too, can use the SALC as an academic resource that will cater to students' educational needs.

Next, let us look at the layout of Hakuoh University's library to see where all the English books are. In the center of the first floor, you will find English periodicals, newspapers, and magazines. There is also a separate room filled with TV monitors where you can watch English movies or TV programs on DVDs and videos. As you go up to the second floor on the circular staircase and turn right, you will find an entire section devoted to English and foreign books. On the way to the back of the room, you will see the picture books, illustrated children's books in Japanese and English. After you go past all the tables and English books, at the far back of the room you can find the SALC area. Here you find graded-readers that will help you build your vocabulary and reading skills. You can check out CDs with some of the graded readers to listen to while you read your books. Of course, you may read the stories silently if you wish. Remember, this area is made for you to study English in your own learning style.

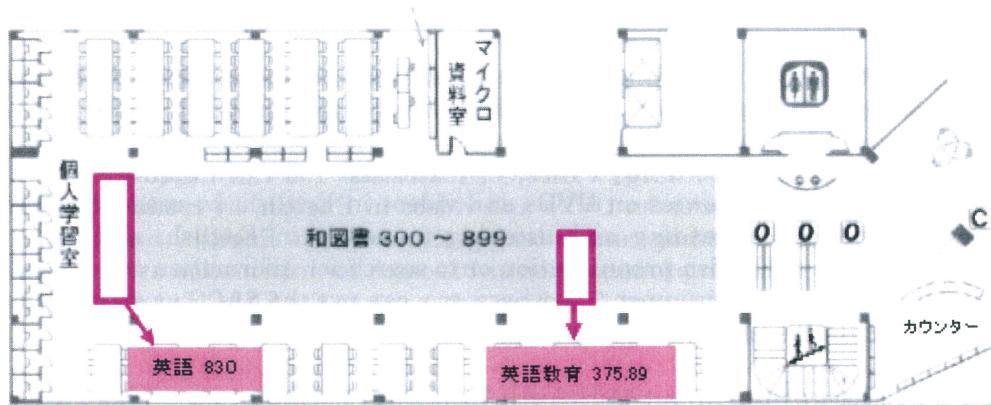
No matter at what level of English you begin, you are able to advance at your own speed in the Hakuoh University Library and SALC area. All faculty and library staff members are here to welcome and support you. Hakuoh University Library and SALC is a place where you can have fun, and enjoy expanding your knowledge as a person. Bon Voyage! Find your treasures!

本館配置図

<1階>



<2階(1)>



<2階(2)>

